

高メチル化カテキン茶べにふうき

新需要創造協議会設立支援
産地と実需者のマッチング



生産地と実需者
(飲料会社等)
をジョイント

農業・食品産業競争力強化支援事業（農林水産省生産局 補助事業）

新需要創造対策事業

【H19年度】

①新需要創造フロンティア育成事業（全国事業）

べにふうき＝野茶研・情報協会・ツムラライフサイエンス・日本製紙クレシア
日清ペットフード・和光堂・アサヒ飲料

高メチル化カテキン茶品種「べにふうき」の用途・需要・生産拡大



予定：H20年2～3月、新需要創造協議会設立、20年度下記事業②・③へ応募
産地単位で、生産者と実需者が契約栽培＝新需要創造協議会



【H20年度】

②成分保証・分別管理システム確立推進事業（地区ソフト事業）

対象：産地（生産者、農協等）、実需者（飲料会社等）

補助対象：検討会の実施、実証、技術マニュアル作成など

③成分保証・分別管理機械・施設等整備事業（地区ハード事業）

対象：産地（生産者、農協等）

補助対象：貯蔵・加工・調製施設、共同利用・分析機器など

国からの
補助率1/2

お問い合わせ先：

(社)農林水産技術情報協会 調査部 岡崎

〒103-0026

東京都中央区日本橋兜町15-6製粉会館6F

Tel 03-3667-8931

Fax 03-3667-8933

Email okazaki@afftis.or.jp

研究成果ダイジェスト 4:

べにふうき緑茶のヒトへの効果を試す

東京海洋大学保健管理センター 教授 木谷誠一

通年性アレルギー患者と季節性アレルギー患者で改善効果を確認

日本茶に含まれるカテキンは、人体に有害な活性酸素の働きを抑えるだけでなく、発ガン抑制作用、抗菌、抗ウイルスなどの効果があることが判明しているが、アレルギー患者での検証はまだ十分になされていなかった。そこで、軽症アレルギー患者での予防効果と臨床効果を明らかにするため、「べにふうき」緑茶を飲んでもらった。

通年性アレルギー患者への臨床試験では、「べにふうき」緑茶の6ヵ月以上の投与で、自覚的にも客観的にも改善効果が認められた。特に、アトピー皮膚炎では、即効性はないものの、長期投与にて改善効果が確認された。また、血液中のIgE総量や末梢血好酸球数は、6ヵ月以上追跡したところ、有意な減少が認められ、他の免疫グロブリンの低下や肝障害は認められなかった。

■通年性軽症アレルギー患者への「べにふうき」緑茶の効果

	自覚的効果	客観的効果	血中 IgE 総量	末梢血好酸球数
6ヵ月投与後	改善	改善	有意に減少	有意に減少

一方、季節性アレルギーに対する臨床試験として、スギ花粉が飛散する時期にスギ花粉患者46人に「べにふうき」緑茶を摂取してもらい（「べにふうき」介入群）、非飲用患者16人（非介入コントロール群）と比較・検討した。スギ花粉の季節前後でスギ特異的IgE総量を比較したところ、非介入コントロール群では増加傾向を認めたが、「べにふうき」介入群では有意な増加は認められなかった。また、末梢血好酸球数は、非介入コントロール群では季節前後で有意に増加したのに対し、「べにふうき」介入群では有意な増加は認められなかった。他の血清中のアレルギーマーカーとして、好酸球活性化の指標である炎症性タンパク質ECP（eosinophilic cationic protein）をモニターしたところ、非介入コントロール群では、季節前後で有意に増加したが、「べにふうき」介入群では減少を認めた。この結果から、「べにふうき」緑茶は、スギ花粉症の症状軽減に役立つものと考えられる。

■季節性アレルギー患者における「べにふうき」緑茶投与前後のアレルギーマーカーの変化

血中アレルギーマーカー	「べにふうき」介入（飲用）の有無	スギ花粉季節前	スギ花粉季節後	増減
スギ特異的IgEの総量	「べにふうき」介入群	15.6±19.76UA/ml	15.7±20.91UA/ml	増加を認めず
	非介入コントロール群	17.5±22.70UA/ml	19.7±25.2UA/ml	増加
末梢血好酸球数	「べにふうき」介入群	215.8±212.4 個/μl	222.35±175.3 個/μl	増加を認めず
	非介入コントロール群	235.9±215.4 個/μl	346.8±300.0 個/μl	増加
ECP	「べにふうき」介入群	3.60±2.19μg/l	3.47±1.75μg/l	減少
	非介入コントロール群	4.34±7.16μg/l	8.95±9.94μg/l	増加